

A. Hettner の 地 理 学 説

——主著 “Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen
und ihre Methoden” を中心に——

田 村 百 代

I は じ め に

Alfred Hettner (1859~1941) はドイツだけでなく、広くドイツ以外の国々にも大きな影響を与えた地理学者の一人である。周知のごとく、彼は本質論や方法論、学史の研究を含む地理学の広い分野に渡って活躍し、1927年には主著 “Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden”¹⁾ (以後 “Die Geographie” に省略) を発表した。

Hettner 地理学の神髄ともいべきこの著書は、日本ではまず 1929年に地理学評論において、下村²⁾によって紹介された。その後は綿貫³⁾が、この著書を基にして Hettner の地理学を盛んに紹介し、これらを切っ掛けとして日本の地理学界においても、1930年代に入ると「地域性の究明」を目的とした地誌研究が確立されていった。

綿貫による一連の研究の中で、1935年発表の『地理学方法論⁴⁾』では、Schlüter, O. の “Die Ziele der Geographie des Menschen” “Die Stellung der Geographie des Menschen in der erdkundlichen Wissenschaft” の全訳と並んで、Hettner の “Die Geographie” が取りあげられている。ここでは “Die Geographie” の第2章 “Das Wesen und die Aufgaben der Geographie” から第4章 “Die geographische Begriffs- und Gedankenbildung” までの抄訳という形式を採用しているので、この著書の主要部分の内容を順を追って一応知ることは可能

である。しかし、この抄訳だけからで、Hettner の地域に対する見解や、地誌学・系統地理学についての考え方を理解するのは容易なことではない。

Hettner を取りあげた学史の研究はいくつかあるが⁵⁾、しかしこれらも、彼が地域について、地誌学・系統地理学の関係について、さらには野外研究と文献研究についてどういう考えをもっていたのか、というような具体的な問題に対して、簡潔な答えを与えてくれているわけではない。Hettner に限らず、とくに日本における地理学史の研究では、原典から出発するという科学史研究の大原則を欠いているため、学史上大きな役割を果たした地理学者たちが、上記のような問題をどう考えていたのか、という最も基本的な点が何一つ明らかにされてはいない。

Hettner の “Die Geographie” を読解することは、ドイツはもちろんのこと、日本における地理学の発達を研究する際にも不可欠なことである。そこで本稿では、“Die Geographie” を中心にして、地域、地誌学と系統地理学、地理学の研究方法についての彼の見解を具体的に明らかにすることを目的とし、Hettner 研究の第一報としたい。

II “Die Geographie” の成立

Hettner の略歴については、日本では水津⁶⁾によって詳しく紹介されている。ここでは、“Die Geographie” の成立に視点を合わせながら簡単にたどっておきたい⁷⁾。

Hettner は 1877 年から 78 年にかけて、ハレ大学 Kirchhoff, A. の下で地理学を学んだ。Hettner は当時の彼自身のことをふり返り、多分地理学を研究するという明確な目的をもって大学に入学した最初の者である、と述べているが⁸⁾、当時の地理学者は、その大部分が大学時代には地理学以外の分野、たとえば地質学や歴史学などを専攻していた。その後、彼は Fischer, T. のいるボン大学へ、さらにはストラスブールの大学へと移り、ここで 1881 年に Gerland, G. の指導の下、チリと西部パタゴニアの気候についての研究で学位を得た。1881年11月には Richthofen, F. von の下で研究を行なうために再びボンへ帰っている。翌 1882 年には、英国大使の私設秘書としてコロンビアのボゴタを旅した。この時の調査記録は、88 年に “Reisen in den columbianischen Anden” と題して発表された。1884年に帰国すると、翌年から 4 年間ドレスデンとライプチヒの大学で過ごしている。ライプチヒでは、当時この地理学教授であった Richthofen のコロキウムに出席している。Richthofen がベルリン大学へ移った後は、Ratzel, F. に師事した。1888 年には再度南米に旅し、帰国後ライプチヒの Ratzel の下で過ごした後、一時チュービンゲンへ移り、99 年以降はハイデルベルク大学で過ごした。

彼が主著 “Die Geographie” を明らかにしたのは 1927 年のことであったが、この著書の起原は彼の学生時代へまでさかのぼることができる。Hettner は地理学を学ぶために大学へ入ったわけであるが、学生時代に大学で学んだ地理学は、彼が想像していたものとはいく分異なり、自然科学的側面の強いものであった。また、学生時代の恩師たち——Kirchhoff, Fischer, Gerland, Richthofen——は、みなそれぞれ地理学に対して異なる見解をもっていた。そこで Hettner は、彼の研究生活の初期の段階から、地理学に対するこうしたさまざまな考え方を、理論

上分析してみようという構想をもつに至った。この課題は、彼の二度にわたる南米旅行中も、常に彼の頭から離れることはなかった。Hettner は、二度目の旅行を終えて帰国した後、1895 年に “Geographische Zeitschrift” を創刊したわけであるが、主としてこの雑誌に順次発表した方法論上の論文を集大成したのが “Die Geographie” であり、その内容はすべて彼自身の経験に基づいている⁹⁾。

“Die Geographie” は 9 章から成立し、第 1 章では「地理学の歴史」が取りあげられ、この部分は全体のほぼ四分の一を占めている。以下、地理学の本質と課題、地理学の研究、地理学の概念・思想の形成、地図と図、文章化、地理教育、学校における地理学、大学における地理学と続いている。地理学の本質に関する彼の主張は、この著書の随所に点在しているため、第 2 章「地理学の本質と課題」だけで彼の意図する点を汲み取ることはできない。彼は、“Die Geographie” の「序文」の冒頭の部分で、「本書は多くの点で、私のライフワーク (Lebenswerk) である¹⁰⁾」と述べている。

III Chorologie としての地理学

Hettner によれば、Ptolemäus や Strabo が活躍した古代ギリシアの時代から、地理学は常に chorologisch な視点をそなえていた¹¹⁾。彼は地理学の本質と課題を考察するために、“Die Geographie” においてはまず「地理学の歴史」を取りあげたわけであるが¹²⁾、ここから引き出された結論を以下のようにまとめている。「科学としての地理学を史的に考察すると、地理学はいつの時代にもさまざまな地表空間 (Erdräume) についての知識であり、つまり古い表現に従うと Chorographie や Chorologie であり、考察の方法だけが科学的認識の発展と共に、時がたつうちに変化してきたことがわかる¹³⁾」。Chorologie とは、地表面の場所による差異に注目した科学であり、この立場からすると、ある場所で

の自然と人文の諸現象は、相互に依存しあっていることになる¹⁴⁾。

歴史的にみると、近代地理学では Ritter, C. が、chorologisch な視点を地理学の前面に押し出し、「地理科学は主として地表面の諸空間 (Räume der Erdoberfläche) を、それらが地上で (どの自然界に属しようとして、またどんな形態をしていても) 充たされている限り取りあげなくてはならない¹⁵⁾」と主張した。次にこの視点を受け継いだのは Richthofen であった。彼は “Chorologie” という古い言葉を復活させて、地理学を「chorologisch な科学」と呼び、「表面の科学」であると定義した¹⁶⁾。なるほど、われわれは地球内部を知らないのであるから¹⁷⁾、地表面を研究対象とすることになるが、Hettner は、場所による差異を考慮せずに地表面を考察しても、それは地理学ではないとし、「地理学は、場所による差異からみた地表面の科学である¹⁸⁾」とした。すなわち、Hettner にとっては、“Länderkunde”こそ地理学の内容を最もよく表現していることになる¹⁹⁾。

広く知られているように、Hettner は科学を①系統的な諸科学 (systematische Wissenschaften)、②歴史的な諸科学 (Zeitwissenschaften)、③空間上の諸科学 (Raumwissenschaften) に分類し、さらに③を天文学と地理学に二分している。Hettner は、事物の歴史的経過を追う歴史諸科学と、地理学とを明確に分けているため、彼の見解の下での地理学では、発生論の考察方法や、地理学の隣接科学としての歴史地理学の存在も認めているが、時間的経過それ自体を追跡するのではなく、一時点の断面を chorologisch に考察することになる。「Chorologieとしての地理学」では時間は一般に後方へ退かなくてはならず、発生論の考え方は歴史学になってはならない。

「Chorologieとしての地理学」においては、自然・人文の二元論の存在も許されない。Hettner に

よれば、人間は自然の中で、自然への依存の中ではぐくまれる。すなわち「自然の本質」は人間への影響 (Einwirkung) にあり、また人間の行動がよびおこされる刺激と動機にある。「Chorologieとしての地理学」では、自然と人間とは常に同時に包括されなくてはならないし、これらは二つの異なる部分に分離されるものではない。理論上、人間は一つの自然界として、三つの無機的自然界 (地殻・水・大気) および二つの有機的自然界 (植物・動物) と並存し、地殻・水・植物・動物・人間・大気と層を成して重なっている。しかし、実際には明確な層の境界はなく、六つの自然界に含まれるあらゆる現象が同時に、しかも因果関係によって結合しながら存在しているのである²⁰⁾。

Hettner は Richthofen の立場を受け入れ、Ritter の「地表面の諸空間の学」という考え方にさかのぼることによって²¹⁾、Chorologieとしての地理学を確立させた。chorologisch な把握を行なう目的は、彼の言葉をそのまま引用すると、「さまざまな自然界と、それらのさまざまな現象形態が共に存在し (zusammensein)、また共に作用している (zusammenwirken) のを理解することによって、国や場所の性格を認識することであり、全地表面を大陸・国・地域・場所に自然的区分 (natürliche Gliederung) することで、全地表面を理解することである²⁴⁾」。

IV 地域の本質

Ritter の主張する「地表面の諸空間」は、Hettner の場合は大陸 (Erdteile)・国 (Länder)・地域 (Landschaften)・場所 (Örtlichkeiten) に相当する。地理学は諸現象の分布ではなく、事物によって充填された地表面の諸空間を、すなわち大陸・国・地域・場所それ自体を考察することになる²⁵⁾。それではこれらの諸空間は、Hettner の場合どのように決定されるのだろうか。

Hettner にとって地域区分とは、①地表面に関するわれわれの科学的認識をあらわしていると同時に、②地誌記載の前提でもある。地理学の研究においては、記載の前提として区分された地域について徹底的な科学的分析を行なうことによって、地域区分の原則 (Grundsatz) を説明することになる²⁶⁾。換言すると、前提として区分された地域の本質を明らかにすることによって、その地域区分の妥当性を説明することになる。では一体、Hettner にとって「地域の本質」とは何だったのだろうか。広く知られているように、Hettner の地理学に対する見解は、多くの点で Schlüter の見解と対立し、「Die Geographie」においても常に批判を加えている。「相観 (Physiognomie)」の立場から、「地域の本質」を景観像の単一性におく Schlüter とは異なり、Hettner におけるそれは、以下の「二つの関係」に基づいている。一つは、場所による差異であり、異なる場所の事象との空間的な因果関係を意味している。すなわち、地理的複合とか、システムとか呼ばれる関係である。他の一つは、同一の場所に生じているさまざまな自然界と、これらの自然界に含まれるさまざまな現象の間の因果関係である。Hettner の見解の下での地理学では、至る所で同一である現象や、場所による差異が認められても、同じ場所に生じている他の現象と因果関係をもたず、あるいはわれわれがこうした関係を認識できない現象は、「地域の本質」の一部をなさないため、地理学の考察からは省かれることになる²⁷⁾。なかでも地理学が考察する人文現象は、土地自然 (Landesnatur) と直接密接な関係があり、土地自然の現象として把握されるものに限定されている²⁸⁾。近代科学の本質の一部は因果関係の追究にあり、因果関係の究明がなされるようになって以来、地理学は記載の段階から完全な意味での科学となった、とみる Hettner にとって²⁹⁾、「地域の本質」は徹底的な因果関係の追究にあった。

ある一つの場所では、そこに生じている諸現象の因果関係によって一つの全体が、すなわち一個体が形成されている³⁰⁾。言い換えると、どんな場所も個性 (Individualität) をもっていることになり³¹⁾、厳密に言えば個々の場所 (Örtlichkeiten) のみが個体である³²⁾。さらに、既述のように異なる場所の事物の間には因果関係が存在し、複合体 (Komplex) が形成されている。Hettner は、これらの複合体をその大きさに従って、地域・国・大陸と名付けた³³⁾。

彼にとって場所・地域・国・大陸は、いずれも自然的区分 (natürliche Gliederung) の結果得られたものである。ここでいう自然的区分とは、人為的区分 (künstliche Gliederung) に対する考え方である。人為的区分とは、一面的に一つの特色に基づけられた区分であり、明確な境界線を得られるかわりに、「地域の本質」を把握することはできない。一方、自然的区分とは、科学的認識を基礎としたものであり、「地域の本質」を、つまり諸現象の因果関係を考慮したものである³⁴⁾。水津は「……ヘットナーは、大陸・国土・地方・局地レベルのひろがり」を研究対象としてとりあげている。しかし、かれがいう「自然を分類基準に (in der natürlichen Gliederung)」したのでは、こうしたレベル自体でてこない。米国のハーツホーンは、それを「現実的な配置に則して (in the actual arrangement)」と英訳している³⁵⁾と述べている。自然的区分の「自然的 (natürlich)」は、Hettner の見解では「自然を分類基準にして」という意味ではなく、人為的、人工的、不自然なという意味での “künstlich” に対して使用されているのであり、自然のままの、加工していない、ありのままのという意味に解釈すべきであろう。

しかし、Hettner がこの自然的区分によって得た大陸・国・地域・場所は、実際には複数の自然現象を分類基準にした自然地域 (Naturgebiet) であった。すでに触れたように、Hettner の地理学は自然

現象を基盤に展開され、彼の見解の下での地理学で研究対象となる人文現象は、土地自然 (Landesnatur) と直接密接な関係があり、土地自然の現象として把握されるものに限定されていた³⁶⁾。そのため全地表面を自然的区分によって、すなわち「地域の本質」を考慮したありのままの区分を行う際にも、三つの有機的自然界 (植物・動物・人間) がもつ意味よりも、三つの無機的自然界 (地殻・水・大気) のもつ意味の方が大きくなるからである³⁷⁾。実際には、地表面をただ一つの基準で区分することは不可能であり、個々の自然現象に注目した自然地域をいくつか折衷して、最終的な自然地域が決定される。この際、いくつかの自然地域のどれに最も意味をもたせるか、その評価が重要な問題となるが、Hettner によれば一般には、区分のレベルの低い段階では、たとえば国や地域のレベルでは、地質構造や地形の単一性が重視され、もっと高いレベルでは気候が重視されることが多くなる³⁸⁾。つまり、彼の自然的区分において出てくる国 (Land) は、行政単位というただ一つの基準を基にした人為的区分によって生じる国家 (Staat) とは、必ずしも一致しない³⁹⁾。

さらに彼は、場所・地域・国・大陸と続く区分のうち、国・大陸といったレベルでは、それ自体に大きな差異が生じていることを指摘している。たとえば、フランスという一つの国 (Land) に属しているブルターニュ・プロバンス・ガスコーニュの諸地域 (Landschaften) では、土壌・気候の差からあらゆる現象に差異が認められるし、ドイツという一つの国でも、シュヴァルツヴァルト・ザクセンシュヴァイツ・リュネブルクハイデの諸地域は、それぞれ大きく異なっている。フランス・ドイツといった国や、大陸のレベルは、ただ「副次的な特色 (nebensächliche Züge)」からみでのみ相互に一致することになり、その点で場所・地域のレベルとは異なっているが、いずれにせよ Hettner の主張する

自然的区分は、科学的認識を基盤として、現実が生じている因果関係を十分把握した上で行なわれなければならない⁴⁰⁾。

V 地誌学と系統地理学

1 地域の性格の究明

地理学では、地表面上のあらゆる現象が研究対象とされるのではなく、何らかの枠をつけることによって取りあげる素材を選択している。Hettner の場合は、諸現象の因果関係が、「素材の選択 (Soffauswahl)」の際に枠組として作用することになる⁴¹⁾。すなわち彼の地理学においては、場所によって差異があるあらゆる現象を研究対象とするのではなく、こうした現象が、他の現象と因果上結合することによって、大陸・国・地域・場所を性格づけている場合に限定される⁴²⁾。さらに、彼の地理学で取りあげる人文現象は、自然と直接密接に関係するものに限られることについてはすでに触れた。

Hettner⁴³⁾ は、現実の地表面における六つの自然界と、これらに属する諸現象の因果関係を、自然を基にした以下の三つの「因果系列 (Ursachenreihe)」に整理している。一つは、地質時代の内的営力の差異によって引き起こされた構造地質学上の因果系列である。内的営力の作用は、具体的には陸・海の分布、陸地上の地形の特色、河川システムなどを引き起こしているわけであるが、次にこれらは他のあらゆる自然界へ影響を及ぼすことになる。二番目は、地質時代の気候を起原とした因果系列である。現在の地表面形態やフローラ・ファウナには、氷河時代の作用や、第三紀の湿潤で温暖な気候の作用がみられ、これらはさらに動物界や人間の生活へも影響を及ぼしている。三番目は、現在生じている主として太陽による日射を起原とした気候上の因果系列である。Hettner によれば、気候上の差異は主として異なる地表面形態への日射の作用の結果生じている。これは次に、当然土壌や水、植物・動物、人間の生

存へも大きな影響を与えている。実際の地表面では以上三つの因果系列がからみ合うことによって、六つの自然界とこれらに含まれる諸現象の因果関係は一層複雑になっている。

Hettner における地誌の記載では、上記の自然を基にした因果系列に従った記載が展開されることになり、ここから広く知られている Hettner の「地誌の図式 (länderkundliches Schema)」が生まれてくる⁴⁴⁾。「地誌の図式」という言葉は、常に変わらない地誌記載の順序を意味している。この図式は、六つの自然界を再現しているのである。実際の自然界では、自然なしには人間の存在が不可能であり、また植物界がなければ動物界も存在できず、有機的自然界は無機的自然界がなければ考えられない。さらに、陸地がなければ大気も水も考えることはできない。そこで図式は陸地・水・気候・植物界・動物界・人間生活の諸現象と展開され、これにそった地誌の記載こそ、「地域の本質」を最もよく表現できることになる。

2 地誌学と一般比較地誌学

Hettner の地理学は地表の諸空間の性格の究明を目的としているが、しかし前述の「地誌の図式」に従った記載を行なうことだけで、すべてが終わるわけではない。彼は、諸空間の性格の究明を基にして一般比較地誌学 (allgemeine vergleichende Länderkunde) を発展させている。地理学は普通、地球上の個々の現象の分布を究明する系統地理学 (一般地理学 allgemeine Geographie) と、一地表空間の性格を明らかにする地誌学 (Länderkunde) とに二分されている⁴⁵⁾。これに対して Hettner は、「一つの科学が、その本質に従って二つの異なる課題を立てるべきではなく、ただ一つの課題をもつべきである……⁴⁶⁾」と主張している。前述のように、Hettner は「Chorologie としての地理学」の立場をとり、場所による差異と因果関係とに地理学が究明すべき「地域の本質」をおいている。そこで、彼にとって

系統地理学は、Chorologie の視点を導入した一般比較地誌学となつて、ようやく地理学の体系の中に位置づけることができたのであった。

Hettner 自身は明確に区別してはいないが、彼の一般比較地誌学は、地球上での①諸現象の比較と、②諸空間の比較の二つが考えられていた。すなわち現象および地域を、Chorologie の視点を導入した類型として把握するのであった。

地表面の現象の多くは、同じように「くり返して (wiederkehren)」存在している。これらのくり返す現象は、普遍的に類概念によって把握可能となる。比較研究はこうした類概念の設定だけでなく、さらに押し進めて規則 (Regel) と法則 (Gesetz) の定立へと導いていくが、この場合も常に Chorologie の視点が導入されていなくてはならない。つまり全地表面の単なる個々の現象の分布を追究するのではなく、常に説明する現象と、その前提となる現象との因果関係が考慮されていなくてはならない⁴⁷⁾。

彼の主張する地表の諸空間の比較では、国 (Länder) や地域 (Landschaften) を、これらを構成するあらゆる現象に注目して比較することになる。地誌の研究から得た地表の諸空間の性格には、各地表空間全体に一樣にひろがる一般性 (allgemeine Charakteristik) が存在する。Hettner は、この一般性をとくに類概念上抽出することを主張している⁴⁸⁾。「Die Geographie」においては、地域の類型化についてあまり明瞭に取りあげられていないが、自然を基にした因果関係を主張し、同じような条件をもつ場合に相互に類似し、普遍的に把握可能な性格が生まれる⁴⁹⁾、と主張する彼にとっては、同じような構造と気候上の位置を伴った諸国 (Länder) が、たとえばスペインと小アジア、メキシコとベルー、チベットとボリビア高地、アマゾンの森林地域と赤道アフリカがそれぞれ比較可能であり、類型としてとらえることができる⁵⁰⁾。

Hettner にとって一般比較地誌学は、地理学の結

論 (Abschluss) であると同時に、地理学の基盤 (Grundlage) でもあった⁵¹⁾。つまり一般比較地誌学は、個別的な地誌による諸空間の性格の究明を基にして成立すると同時に、一般比較地誌学から得た諸現象と諸空間の類型は、逆に個別的な地誌を記載する際に、複雑な現象を簡潔で、しかも明瞭に認識させることが可能なのである⁵²⁾。

VI 地理学の研究方法

地理学の研究は、実際の野外観察に基づかなくてはならない。すでにローマ時代に、地理学者には自己の旅行の経験が要求され、当時旅行をせずに地誌を書いた Timäus は、歴史家 Polybios によってこの点を非難されていたという⁵³⁾。しかし、地理学においては、文献研究も無視してはならない。両者は補完しあわなくてはならない⁵⁴⁾。

地理の研究を始める際には、野外観察を行う前にまず文献研究によって、前もって問題とする地域の知識を得ておくなくてはならない。文献資料としては地図・写真・統計・著書・論文などがある⁵⁵⁾。文献収集で重要な点は、古い文献や、外国語で書かれた文献を忘れてはならないことである。Hettner は、とくに大学における地理学の研究には、語学の知識が不可欠であるとさえ述べている⁵⁶⁾。次に、収集した文献の資料批判を行わなくてはならない。というのは、野外観察は一定の素養を前提とするからである。そこで、観察者すなわちここでは著書・論文の筆者の科学上の能力を評価しておかなくてはならない⁵⁷⁾。また気象やその他の観測、人口調査などの統計類は、Hettner によると大部分は実用を目的として作成されているため、地理学の研究で利用するためには、まず最初に加工し、さらに自己の観察によって補充し、補完していく努力が必要となる⁵⁸⁾。

さて野外観察であるが、これは intensive にも extensive にもなりうる。観察は専門知識を必要と

し、深い観察を行う能力は一時的に得られるものではない。科学が進歩すればするほど、観察は専門化していく。専門の知識を基礎としてのみ、正しい解答を引き出すことができるが、しかし Hettner は、こうした科学の素養は、常にまたそれ自体先入観という危険性をはらんでいると指摘する。彼はさらに、野外で正しい知識を得るためには、聴き取りをする際の質問者の技量と、質問に答える人の能力も問題となることを指摘している⁵⁹⁾。観察記録をまとめる際には、既存の資料をすべて参考にすべきであり、この段階では文献研究と実験が補完の意味をもってくる⁶⁰⁾。

既述のように、Hettner の地理学は、地表面の諸現象の徹底的な因果関係の追究にあり、実際の研究段階では、野外観察・文献研究を基にした帰納的推理と演繹的推理とが常に相互に結合している。またこの追究の際に大きな意味をもってくるのが「比較」という方法であり、説明する現象が、前提となる原因と同一の地理的分布をとっているかどうかという点から、さまざまな場所を比較するのである。これは全地表面でも、個別的な地域においても適用が可能である⁶¹⁾。

いずれにせよ地理学の研究においては、観察と文献研究とは並存するのであり、観察を中心とする研究者は、その観察を文献研究によって補完し、また文献中心の研究者は観察の能力をみにつけると同時に、少なくとも自己の研究に関連する土地および現象を熟視するならば、地理学の研究は最も成果があるのである。Hettner は、観察を中心とする研究者が文献研究を、文献を中心とする研究者が観察を無視するようになった時には、地理学に大きな危険性が生じると指摘している⁶²⁾。

VII 結 び

以上、Hettner の主著 “Die Geographie” を基にして、彼の地理学説について明らかにしてきた。

この著書は、長年彼が発表してきた論文を 68 歳の時に集大成して出されたものであり、彼の経験を基盤としたライフワークであるが、詳細に読んでいくと見解の不統一な点、また不明瞭な点がみられる。

すでに述べたように、Hettner は「相観(Physiognomie)」の立場から景観像の単一性に「地域の本質」をおく Schlüter には批判的である。しかし、「Die Geographie」の中には、「……アルプス・ドイツ中位山地・アペニン山脈の地形は何と異なり、スカンジナビア諸国・地中海南部・砂漠・熱帯・高地の色彩と色調は何と異なっているのであろう…⁶³⁾」「小地形は地域の相観にとって重要であるだけでなく、しばしば大地形を理解するための道を示している⁶⁴⁾」「地理学は場所による差異を取りあげ、その際に、その差異が個々の場所にとって本質的であり、すなわち個々の場所の外観(Aussehen)からみて、また他の現象への影響からみて価値のある場合に限られる⁶⁵⁾」というように、Schlüter の立場と区別できないような記載がみられる。

また前にも指摘したように、「Die Geographie」においては系統地理学に相当する一般比較地誌学についての取りあげ方が不統一であり、不明瞭である。その理由は、彼が現象の類型化と、地域の類型化とを明確に区別していないからであり、ある箇所では、一般比較地誌学は現象の類型化を目的としているような記載がなされ⁶⁶⁾、またある箇所では、地域の類型化のみが一般比較地誌学の目的であるかのような記載が行なわれている⁶⁷⁾。

すでに Dickinson, R. E.⁶⁸⁾や水津⁶⁹⁾は、Schlüter が Hettner よりもわずかに遅れて、Chorologie としての地理学を批判する立場から、地形学にならって文化景観の形態学として人文地理学を位置づけることにより、地理学の対象を明確にしたこと、また Hettner の次の時代の地誌の研究で活躍した Krebs, N., Lautensach, H. によって、自然・人文を包括する景観類型学が達成されたことを指摘し

ている。Hettner の主著“Die Geographie”において生じている不統一、不明瞭な上記の二点は、Hettner 以降に新しい学説の成立として発展していったことになる。とするならば、“Die Geographie”におけるこの二点こそ、ドイツ地理学史上の Hettner の位置づけに、大きな意味をもっているものと考えられる。

本稿を作成するにあたり、ご指導を賜った立正大学高野史男教授に心から感謝申し上げます。

(1981 年 10 月 27 日 受付)

(1981 年 11 月 7 日 受理)

参考文献

- 1) Hettner, A. (1927): *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. F. Hirt, Breslau, 463 S.
- 2) 下村彦一 (1929): 紹介及批評. A. Hettner, *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. 地理学評論, 5, 258~259.
- 3) 綿貫勇彦 (1929): ヘットナーの地理学方法論及び地表区分. 地理学評論, 5, 851~872.
綿貫勇彦 (1930): 人文地理学の特長. 地理学評論, 6, 760~793.
綿貫勇彦 (1932): 『地理学方法論』岩波講座, 地理学総論.
綿貫勇彦 (1935): 『地理学方法論』地人書館, 236 p.
- 4) 綿貫勇彦 (1935): 前掲 3)
- 5) Plewe, E. (1960): Alfred Hettner, seine Stellung und Bedeutung in der Geographie. *Heidelberger Geographische Arbeiten*, 6, S.15~27.
Dickinson, R. E. (1969): *The makers of modern geography*. R. & K. Paul, London, pp. 112~125.
Beck, H. (1973): *Geographie. Europäische Entwicklung in Texten und Erläuterung*. K. Alber, Freiburg, S.318~325.
水津一朗 (1974): 『近代地理学の開拓者たち——ドイツのばあい——』地人書房, pp. 111~143.
- 6) 水津一朗: 前掲 5)
- 7) Dickinson, R. E.: 前掲 5)
- 8) 前掲 1) S. v.
- 9) 前掲 1) S. v.
- 10) 前掲 1) S. v.
- 11) 前掲 1) S. 122.
- 12) 前掲 1) S. 1.
- 13) 前掲 1) S. 121.

- 14) 前掲 1) S. 117, S. 122.
- 15) 前掲 1) S. 122, S. 124.
- 16) 前掲 1) S. 107, S. 122.
- 17) 前掲 1) S. 117.
- 18) 前掲 1) S. 122.
- 19) 前掲 1) S. 122.
- 20) 前掲 1) S. 115~117, S. 131~132, S. 151.
- 21) 前掲 1) S. 125.
- 22) 前掲 1) S. 126, S. 218.
- 23) 水津一朗 : 前掲 5) p. 121.
- 24) 前掲 1) S. 130.
- 25) 前掲 1) S. 122, S. 124, S. 133.
- 26) 前掲 1) S. 293.
- 27) 前掲 1) S. 117, S. 129, S. 131, S. 172, S. 217.
- 28) 前掲 1) S. 147, S. 150, S. 273.
- 29) 前掲 1) S. 186, S. 252.
- 30) 前掲 1) S. 217.
- 31) 前掲 1) S. 293.
- 32) Hettner, A. (1932) : Das länderkundliche Schema. *Geographischer Anzeiger*, **33**, S. 1~6.
- 33) 前掲 1) S. 293.
- 34) 前掲 1) S. 294~306.
- 35) 水津一朗 : 前掲 5) p. 134.
- 36) 前掲 1) S. 147, S. 150, S. 273.
- 37) 前掲 1) S. 313.
- 38) 前掲 1) S. 311~316.
- 39) 前掲 1) S. 294.
- 40) 前掲 1) S. 306, S. 308, S. 316.
- 41) 前掲 1) S. 130.
- 42) 前掲 1) S. 222.
- 43) 前掲 1) S. 273~274.
- 44) 前掲 32)
- 45) 前掲 1) S. 398.
- 46) 前掲 1) S. 107.
- 47) 前掲 1) S. 188, S. 275.
- 48) 前掲 1) S. 223, S. 227~228, S. 403.
- 49) 前掲 1) S. 275.
- 50) 前掲 1) S. 404.
- 51) Hettner, A. (1895) : Geographische Forschung und Bildung. *Geographische Zeitschrift*, **1**, S. 7~11.
- 52) 前掲 1) S. 223~224.
- 53) 前掲 1) S. 23.
- 54) 前掲 1) S. 180.
- 55) 前掲 1) S. 179, S. 182~185.
- 56) 前掲 1) S. 452.
- 57) 前掲 1) S. 181.
- 58) 前掲 1) S. 176.
- 59) 前掲 1) S. 172~175.
- 60) 前掲 1) S. 172, S. 179~180.
- 61) 前掲 1) S. 186~189.
- 62) 前掲 1) S. 162, S. 180.
- 63) 前掲 1) S. 153.
- 64) 前掲 1) S. 203.
- 65) 前掲 1) S. 231.
- 66) 前掲 1) S. 189~191.
- 67) 前掲 1) S. 107, S. 404.
- 68) Dickinson, R.E. : 前掲 5)
- 69) 水津一朗 : 前掲 5)

Alfred Hettner's Geographic Thought,
with Special Reference to his Main Work
"Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden"

Momoyo TAMURA

A. Hettner (1859~1941) is one of the most leading geographers who had a profound influence not only on German but also on Japanese geography. He was interested in the history of geographic thought and the geographic methodology from his early days of the development of his study and published many papers on these subjects in "Geographische Zeitschrift". In 1927, when he was sixty-eight years old, he collected these papers and published his main work entitiled "Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden". This book is his "Lebenswerk" and is based on his own many experiences in his long study life.

Reading this book intensively, we find that there are an inconsistent and an unclear point in it. The inconsistent point is that in some cases Hettner does not distinguish his views from O. Schlüter's. Hettner was basically opposed to Schlüter's views of "Landschaftsbild", but Hettner writes, for example, "(S. 231) Die Geographie fasst.....örtliche Verschiedenheiten auf, soweit sie für die einzelnen Erdstellen wesentlich sind, d. h. in ihrem Aussehen oder in ihrem Einflusse auf andere Erscheinungen zur Geltung kommt,.....". The other unclear point is concerned with systematic geography or his "allgemeine vergleichende Länderkunde". He distinguishes unclearly between typification of phenomena and of regions in this work. These two points in his main work are important to place his thought in the history of German geography.